

# 東北応援ツアー レポート「現地を訪問して想うこと」

2013年 理工学部卒業 志村彩

東北応援ツアーに参加するのは初めてでした。震災以降、ボランティアなどで被災地に貢献しなければという思いはありつつ、現地に足を運べていませんでした。しかし、今年は縁があったのか、今回のツアー以前に宮城県と福島県を訪れる機会があり、震災から3年経った被災地に触れました。そんな中、偶然にも校友会の東北応援ツアーの存在を知り、まだ行ったことのなかった岩手県のコースに参加できることになりました。

今回のツアーでは、岩手県の被災地の今を知ることができたと同時に、復興のために自分にもできることがあるのだと気付かされました。大切だと感じたのは3点です。

1点目は、ボランティアはまだ必要だということです。1日目に訪れた遠野ボランティアセンターは、震災直後のピーク時には10万人規模のボランティアを受け入れる拠点だったようです。以前から遠野は地理的理由により、周辺での災害発生時の後方支援拠点として整備されてきた町でした。今では人々の関心も薄れつつあるのか、訪問した日のボランティア参加者は6人でした。確かに今は、がれき処理を始めとする復旧作業はほとんど終わっています。しかしこれからは復興を進めていくためのコミュニティづくりと、多くの人に被災時の状況を伝えるためのスタディツアーを行う人員が必要だとボランティアセンターの方が仰っていました。被災地が被災地でなくなるまでには、まだ時間がかかり人手も必要です。もう3年経ったから何もできないのでは、とっていた自分にも手伝えることがまだあるのだと分かりました。

2点目は、過去の災害で得た教訓を周囲の人に教え、伝える大切さです。ツアー内では何名もの方から、震災発生時の被害、避難状況を語っていただきました。その話の中で痛烈に感じたことは、津波に巻き込まれた人とそうでなかった人がいたことです。「釜石の奇跡」で有名な釜石小学校の生徒たちを始め、津波で命を落とさなかった方々には共通点があったと感じます。自然の驚異を甘く見ないということです。過去にも幾度となく津波に襲われた地域では、様々な形で教訓が残っています。しかし、中には今まで来た津波以上はないと思い油断して、東日本大震災で亡くなられた方もいたようです。防波堤があるから大丈夫、頑丈な建物だから大丈夫と過信せず、自らの命は自らで守る。地震大国日本に住む誰もが、昔起こった出来事を他人事と捉えずにその教訓を胸にとどめておく必要があると感じました。

3点目は岩手（東北）にはおいしいもの、素敵な文化がいっぱいあるということです。被災地は復興途上ですが、元から東北という地には、美しい風景や地域に根差した食文化があります。新鮮な魚介類やずんだもち、きれいな水に育まれた地酒など、食べ物をテーマに旅するもよし、世界遺産の地・平泉や遠野物語などの歴史文化に触れるもよし。特に若い世代にとっては、皮肉ですが震災があったからこそ東北地方を注目するようになった面もあります。だからこそ今、元気になろうと頑張っている東北に、旅行でもボランティアでもどういう形でもいいので、私と同じ若い人たちにもぜひ足を運んでみてほしいと思いました。

新たな発見が多く、有意義な時間を過ごすことができたツアーでした。機会があれば是非また参加し、個人的にも東北旅行をしたいと思います。